史林
第八卷 第四號
大正十二年十月一日發行
（通卷第三十二號）

研究

榻布攷

文學士 那波利貞

一

支那古典に記載せらるゝ諸織物類が其の材料の點將た其の織成法の點に於て多種多樣ならむことは何人にも容易に推想し得らるゝ所なるが、其の材料其の織成法に就きての比較的確實性に富める研究は從來あまり試みられて居らない樣である。

殊に其の本文の製作年代の確實ならざる彼の『尙書』禹貢篇には隨分各種の織物の名稱が現はれ居りて、之に對する支那の學者の研究も相當多量には存するが、其の悉くが信憑するに足るものか如何かも勿論疑問である。それが或る一種の織物の名稱なること明瞭なるものに在りても其の織成法の如何なるものなるかを解し得られざるものもあ

り、其の最も難解なるものに於ては先づ其の織物の材料が何物なるかすら知り得ざるものがある。

今禹貢篇の如き疑問多く且つ不確實なる史料は暫く措き、其の記載が史實を傳へたるものとして信憑せられ得る範圍内の史料に於ても、茲に題として掲ぐる所の『史記』所見の榻布の如きは實に此の材料難解なる織物の一にして、從來の支那人學者の說も二三は存すれども何れも精密なる學術的考據を缺き、從つて榻布の材料の何物なるかは今日に至る迄も尙未決定の儘になつて居る樣である

此の種の研究の甚だ困難にして、偶々一家の說を立つる者あるも多くは俗に所謂水掛論に終る所以のものは、先づ第一に其の名稱の儘の當時の織物の今日に傳はり存せざるもの多く、從つて實物に就きて研究を重ね以て古典の記載と比較解釋することの不可能なる爲であり、第二に往昔或る名稱を以て稱呼せられたる織物が、實は今日に於ても嚴として傳世又は織成せられ居りながら、時代の異なるに從ひて其の稱呼を異にし、而して其の織物の稱呼の變遷したる歷史が今日明確に知悉せられ居らざる爲に、其の實物が不知不識の間に吾人の眼前に橫はりながら之を解決することの困難なるもあり、第三に或る一定の織物名稱が古今を通じて少しも變らず存在通行しながら、時代の異なるに從ひて其の名稱の對象物を異にする爲にそれと指摘し能はざる場合もあるからである。而して古代織物の織成法、別して其の材料如何の研究の困難は、多くの場合此の第二第三の事情の爲に惹起せらるゝことが多き樣に思惟せられる。

二

榻布なる文字が一種の材料を以て織成せられたる織物の名稱として支那古典の上に現はるゝ最初は、吾人の寡聞を以て見れば、如何しても司馬遷

の『史記』の記載にして、而も『史記』が『尙書』禹貢篇などとは撰を異にし最も信憑するに足るべき記載なる以上は、古く支那にて榻布と稱呼せらるゝ織物の織成使用せられたること、何等疑を容るべき餘地が無い。卽ち『史記』貨殖列傳に

夫用貧求富。農不如工。工不如商。……通邑大都。酤一歲千釀。醯醬千瓿。醬千甔。屠牛羊彘千皮。……筋角丹沙千斤。其帛絮細布千鈞文采千匹。榻布。皮革千石。

と見ゆる。汲古閣本に據れば榻の字は手扁に从へる搨字の如く見えざるに非ざるも、他の諸版並に該條の諸書に引用轉載せられあるものより觀る時は、やはり木扁に从へる榻字の方が正確なるらしい。而も此の榻布の二字は不可思議にも支那古典上にては『史記』の該條に唯一回出現せるのみにして、吾人の不敏なる爲、未だ其の以前及び以後の書籍に『史記』該條の引用轉載に非ずして此の文字の現はるゝことを知り得ないで居る。

此の榻布が如何なる材料に據りて織成せられたる織物なるかは、支那人學者の間に於ても古來疑問とせられて居り、偶々二三の說は立てられ居るも何れも確乎たる證左の以て信憑徵證するに足る論據に立てる解釋に非ず。又近頃の西洋の東洋學者の二三家、譬へばヒルト氏 (F. Hirth) ロックヒル氏 (W. W. Rockhill) ラウファー氏 (Barthold Laufer) などが此の問題に關聯すべき論著を發表せるも、ラウファー氏が其の著『シノ・イラニカ』(Sino Iranica) の第四百九十二頁に於て少しく直接的に論及せるに止まる外は、今日迄にはさして精密直接に此の問題を研究せるもの無きが如く榻布の材料如何の問題は西洋の支那學者に於ても亦尙は未解決の儘に遺されて居る樣に思はれる。

榻布の材料如何は實際相當に研究の困難なる問題にして、其の確實なる決定は更に今後幾多の學

者の研究に俟たねばならず、又た研究題目としては一見甚だ瑣事の如けれども、其の研究の結果の支那の織物史上に與ふる影響は實に甚大なるものあれば、あながち史上の瑣事として輕視すべきものには非ざらむと考へられる。尤も茲に述べむとする鄙見も、決して吾人としても絶對的確實性ある斷案と思惟せるものには非ざるも、聊か寡聞不敏の才を以て今迄に探究したる結果を發表して博雅諸賢の示教を仰がむとするに外ならぬ。

三

古來支那人學者間に於て榻布の材料の何物なるかを論じたる諸說は、略々之を三種に分類して觀ることが出來ると思ふ。

其の第一は『史記』貨殖列傳所見の榻布は『史記』該條の外には全然出現せざる文字なるが、實は榻は意味の文字として使用せられたるものには非ずして、單に或る織物に對する當時の稱呼の音譯たるに止まるものと觀察し、之が班固の『漢書』貨殖傳に荅布として記載せられあれば、『漢書』所見の荅布は『史記』所見の榻布であり、而して『漢書』該條の晉の孟康の注に「荅布白疊也」とあり、『史記』該條の南北朝の裴駰の說に「案漢書音義曰榻布白疊也」とあれば、『史記』所見の榻布は所謂白疊なる一種の織物なりと解釋する說である。但し白疊の何物なるかは少しも論及する所がない。

其の第二は右に所謂白疊を以て木綿（Cotton）織物なりと解し、從つて『史記』所見の榻布『漢書』所見の荅布は同一織物なれば共にこれ木綿織物なりと觀る說である。此の說の起りし時代が何代頃なるかは勿論疑問なるのみならず、又た孟康や裴駰の使用したる白疊の意味も不明にして、孟裴二氏が果して白疊を木綿織物の意味の文字として注文に採用したるか如何かも明確ならず、第一說と第

二說とは其の區分比較的曖昧なるの譏を免れ難しと雖も白疊を以て明かに木綿織物なりと解し從つて榻布荅布を木綿織物なりと解する說の、少くとも既に唐時代の一部學者間に唱へられたるならむことは徵證し得らるゝのである。卽ち『漢書』の荅布に對する唐の顏師古の注に

師古曰。麤厚之布也。其價賤。故與皮革同其量耳。非白疊也。荅者重厚之貌。而讀者妄爲榻音非也。

とある「非白疊也」の一句は、恐くば顏師古が『唐書』西域傳の記載に

高昌有艸。名曰白疊。擷花可織爲布。

と記載せらるゝが如き唐代人一般の知識として白疊は木綿(Cotton)なりと謂ふ知識を抱懷して而して後に荅布は木綿織物なる白疊に非ずと注したるものかと察せられるからである。而も顏師古の說は宋の司馬貞の史記正義にも採用せられて

顏師古曰。麤厚之布也。其價賤。故與皮革同量耳。非白疊也。荅者厚之貌也。按白疊木綿所織。非中國有也。

とあれば、司馬貞の生存時代なる宋時代に至りて益々白疊を木綿織物なりと解し、施きて『史記』の榻布『漢書』の荅布をも木綿織物なりと解釋する學者多かりし爲、司馬貞が顏師古の說を論據として更に之を否定したる經緯を察知することが出來る之を前揭の『唐書』西域傳の記載と考へ合す時は、少くとも唐時代に白疊を木綿と解し、施きて榻布荅布をも木綿織物なりと解釋する學者の相當に存せしことを知り得るのである。此の白疊卽木綿說に基きて榻布卽木綿說を爲す風は、後世に至る迄も餘程勢力ありしが如く、淸の俞正燮の『癸巳類稿』所收の「木棉考」にも此の見解を採りて

木綿有木本。有草本。其爲布初見者史記貨殖列傳榻布千石。注引漢書音義云白疊也。三國志東夷傳云。倭人男子露紒以木棉招頭。

と論じて居る。

其の第三は榻布を以て、一種の織物なりと觀ての白疊說、並に木織綿物なりと解しての白疊說兩つながらの何れをも採らずして、單に之を以て麤厚之布なりと解する說にして、之は前揭の通り『漢書』貨殖傳の荅布の條の注に見ゆる唐の顏師古の說であつて、此の說も後世に至る迄相當有力なりしが如く、其の然る所以の論據は擧げ居らざるも淸の梁玉繩の『史記志疑』卷三十一、沈欽韓の『漢書疏證』卷三十四、王先謙の『漢書補注』卷九十一等は皆此の說を採用して居る。

四

以上述ぶる所は『史記』所見の榻布と『漢書』所見の荅布とを以て同一の織物を指せるものとして立說したる支那人學者の異說を大別概觀したるものなるが、前にも申せし通り支那人學者間に於ては

實は第一說と第二說とは甚だ區別の曖昧なる樣に取り扱はれて居つて、顏師古の所說などにては茫漠として白疊を以て木棉織物なりと解し、以て晉の孟康の謂へる白疊をも木綿織物なりと觀察し居れば、此等支那人學者の諸說は更に之を大別すれば荅布卽木綿織物說、荅布非木綿織物說の二種となり、從つて榻布も木綿織物なるか、非木綿織物なるかの何れか一つに歸せざるべからざる譯となるのであるが、是は勿論先づ白疊が木綿たるとの確實なる證左の上に立ちての立論にして、鄙見を以て比較的精密に區分したる通り、白疊が木綿なりや否やも根本的に不明確であり、白疊を以て單に一種の織物の名稱たるかの如く觀察し得らるゝ筆法を以て荅布に注釋せる第一說の如きもあり、隨分複雜したる研究題目となるのである。

吾人は今先づ研究の順序上よりして、從來の支那人學者が一般に『史記』所見の榻布と『漢書』所見

の荅布とを以て同一織物を指せるものと觀察せる見地の妥當なりや否やてふ問題より解決して論旨を進めむと欲する。

『史記』が漢の司馬遷、『漢書』が後漢の班固の製作なるは今更論ずる迄も無い。然れば班固が『漢書』製作に當り其の父班彪の編纂集錄したる一部草稿及び文書に據りたると共に、司馬遷の『史記』の記載をも參考に供したることは異論の無き所にして、處々殆ど『史記』の記載其の儘を借用轉載したる個處あり。其の貨殖傳の如きは殆んど『史記』貨殖傳の寫錄とも見らるべき程にして、茲に問題とせる荅布の條の如きは全然『史記』の記載を轉載せる如く、一字一句も異なる所がない。今『漢書』及び『史記』の此の條の記載にして幸にして魯魚焉馬の誤なくして今日に傳へられたるものとすれば『史記』に榻布とあるものが『漢書』にて荅布となれるなれば、兩者の關係は自ら明瞭となる譯にして、若し後漢時代に既に『史記』の榻布が何物なるか不明となり居りしならば、班固が『史記』の該條を轉載して『漢書』に採用するに當り、必ずや『史記』の原文通り榻布と書すべき筈である。然るに其の前後の文字を一字も變更せずして榻布の榻の一字のみを變じて荅布と書せるは、つまり後漢時代に於ても此の一種の織物が前漢以來變化せざる稱呼を繼續して廣く世間に傳はり織成使用せられ居りし爲、必しも『史記』所記の榻布の文字を以て記さずとも當時の何人にも容易に解し得らるゝを以て、『史記』には榻布とあるにも係らず『漢書』には後漢時代通行の此の織物の稱呼の音を示すに過ぎざる荅布の文字を使用したるものならむと解し得ると思ふ。此の種の例は『漢書』には夥多しく在りて、淸の趙翼が『二十二史劄記』卷二「史漢不同處」の條に指摘せる通り、『史記』に袁生、伍徐、朱房、郤陽侯などとあるものが、『漢書』に於てはそれ〴〵

轅生、伍逢、朱防、合陽侯などに改められてある。蓋し其の大部分は音に當てゝ字を變ぜしものの如く、此の類例より類推しても榻布に荅布を當てたるものゝ同一織物を指せること甚だ明瞭にして、前後兩漢を通じて或る織物に對して榻布又は荅布の何れを以てしても其の名稱を音譯するに差閊なかりしことを察知することが出來る。

五

次に晉の孟康が『漢書』貨殖傳の荅布の條の注に使用したり、唐の顏師古が使用せる白疊なる文字が何物を指せるかを論究せむに、先づ唐代の所傳より溯源せむか、『舊唐書』林邑國傳に其の風俗を記して

王著白氎古貝。斜絡臂。……夫人服朝霞古貝。以爲短裾。

とあり、又た『北史』眞臘國の條に

王著朝霞古貝。瞞絡腰腹。下垂至脛頭。……常服白疊。以象牙爲屧。

とあり、又た『南史』夷貊傳下の高昌國の條に

有草。實如繭。繭中絲如細纑。名曰白疊子。國人取織以爲布。布甚軟白。交市用焉。

などとある。此の疊氎二字が同じ使用法に出づるものなりや否やは大に考究を要すべきことゝ考へらるゝが、ヒルト、ロックヒル兩氏は帛疊、白疊、白氎を何れも同一材料の織物の稱呼と考察して趙汝适の『諸蕃志』の研究『Chau-Ju-Kua』の第二百十八頁の注に次の如く論じて居る。

木綿及び木綿織物は初めて中央亞細亞地方より支那に入りしが如し。何となれば支那に於て早く之等に附與せられたる po-tie 又は pai-tie の稱呼は蓋し土耳古語より來由せるが如き故なり支那文字にて帛疊又は白氎とせらるゝ po-tie の稱呼をなす此の二個の文字は支那語に於ては無

意味なり。かく文字を異にして而も同音なるはこれ外國語なるが爲にしてチャガタイ・ドルキー語の Cotton の意味なる Pakhta (پخته) なる語は蓋し其の淵源たるに近かるべし。

之に對してラウファー氏は『シノ・イラニカ』第四百九十頁に於て異說を提唱し、帛疊、白氎の音が Pakhta の音に當らざることを指摘して次の如く論じて居る。

ヒルト、ロックヒル兩氏の說に根本的誤謬二點あり。第一にヒルト氏が屢々支那古音を再現せんとして使用し而も失敗する彼の廣東音は決して古代支那音を代表するものに非ずして、混亂せる現代支那音の僅か少しく前の時代に行はれたる所の近世の方言たるに過ぎず。支那古代音は單に支那音韻辭書の記載の研究と印度支那語との比較言語學上の研究とに依りて探究想見し得るのみ。廣東人と雖も白疊を pak-tip と發音して po-tie と發音せず。(中略) 帛疊の古音は bak-dzip 又は bak-dip にして決して pak-ta に非ず。從つて Pakhta とは何等の關係無し。第二に支那漢代に通行せる外國語を以て比較的近世の土耳古語と關係せしめて考ふることは不合理なりとの譏を免れず(中略)矧んや Pakhta なる語の起原は土耳古に非ずして波斯に在るをや。而して白疊が如何なる材料を以て織成したる織物なるかに就いては同じく『シノ・イラニカ』第四百八十九頁に於て之に論及し。

疊はイラン語にして普通の支那音にては tie なれども、古くは dźiep 又は dziep, diep, dib と發音せられ、蓋し中世波斯語の dip, dep 又は近世波斯語にて絹或は花緞を意味する dibā 金襴を意味する dibāh 及び亞剌比亞語にて同じく金襴衣を意味する dibādź なる諸語と關係あるが如し。と謂つて居るから、要するにヒルト、ロックヒ

ル兩氏の見解に於ては、白氎、白疊は同一の織物に對する外國的名稱の異字音譯にして、これが土耳古語系の木綿織物の意味ならむことを謂ひ、ラウファー氏の見解に於ては暫く白又は帛を以て一種の形容副詞と觀て疊の字が波斯語系の絹織物金襴等の意味ならむことを謂へるのである。

却説此の白氎帛疊等を各々二字共に之れを外國音の音譯と觀るべきなるか、或は白、帛を意味的に使用せられたる形容副詞と觀て氎又は疊のみが外國音を音譯せるものと觀るべきなるかは甚だ重要なる問題と考へらるゝが、ヒルト、ロックヒル兩氏以外に於ても、夙に此の二字共に外國音の音譯ならむと謂ふ見解を發表せる學者も無きにしもあらず。卽ちシャヴアンヌ氏(E. Chavannes) は Documents sur les Tou-Kiue Occidentaux の第百二頁の注に於て

白疊は何となく木綿織物に關するらしく思はる

後漢書哀牢夷傳の中に見ゆる哀牢夷の製產する帛疊は木綿織物の事を謂へり。

と論じ、明々に二字共に音譯文字なりとは明言せざるも宛として然るかの如き態度を持して之を木綿織物ならむかと疑つて居る。之に對してラウファー氏も亦一說を提出して『シノ・イラニカ』の第四百九十頁にて

白氎又は帛疊の古音は bak-dib にして、其の bak が中世波斯語にて Cotton を意味する Pambak なる語、近世波斯語の paupa なる語、アルメニア語の bambak なる語などの遺型ならむと考ふるも決して不可能事には非ず。幸に此の推想にして當れりとせむか、支那の白氎、帛疊卽ち po-tie なる語は中世波斯語の bak-dib 卽ち pambak-dip より來由し、蓋しこれ木綿金巾(カネキン)又は木綿織物ならむか。

と論じて居るが、實はラウファー氏の所見は確

乎たる論據ありての斷案には非ざるが如く、『シノ・イラニカ』中の說に於ても或る場合には氈、疊の字のみを論じて白、帛を去る見解より、之を絹織物を意味する中世波斯語と關係ある如く論じ、他の場合には白、帛の字をも音譯文字と認むる見解より、中世波斯語にて木綿織物を意味するpambak-dip に來由するならむかと謂ひ、其の研究的論據は多少動搖致して居る樣である。併し不幸にして比較言語學の知識缺乏する吾人には此等の諸說に對して何等の批判をも加へ得ないのを遺憾とすれば、他の方法の一として、吾人は先づ支那史料の上にて疊、氈、白氈、帛疊等の文字が如何樣に慣用せられて居るかを一瞥して論議を進めたいと思ふ。

六

帛　疊　蠶桑知染采文繡罽氈帛疊繭干細布（後漢書哀牢夷傳）

疊　波斯國……出綾錦疊氎氍毹氎氈（魏書西域傳）

白疊古貝　呵羅單國…元嘉七年遣使獻金剛指鐶赤鸚鵡鳥天竺國白疊古貝。葉波國古貝等物（宋書夷蠻傳）

錦疊細布　波斯國。多……錦疊細布氎氎氈氎（隋書西域傳）

白疊布　高昌……有艸。名白疊。擷花可織爲布（唐書西域傳）

右は先づ白疊の文字の現はるゝ代表的史料と觀らるべきものを列擧せしものなるが、右の如き支那人の慣用法よりすれば、白疊、錦疊などと使用せられある外に單に疊なる一字使用の例もあれば、白或は錦を以て一種の意味的使用の形容副詞と見て、此の一種の織物の名稱としては先づ疊又は疊布と謂ふが支那人の疊字の使用習慣より見て、妥當らしく察せられないでもない。

白氈朝霞　波賀伽盧國……衣用白氈朝霞。以蠶帛傷生不敢衣（唐書南蠻傳）

白氈朝霞布　眞臘……以白氈朝霞布爲衣（唐書南蠻傳）

白氎古貝　環王本林邑也…王衣白氎古貝斜絡臂（唐書南蠻傳）

白氎布
縹　氎　雲南土産縹氎卽白氎布。堅厚縝密。顏類紬（廣輿記）

氎　外國細毛布也（正字通）

右は先づ白氎、又は氎の字の現はるゝ代表的史料と觀らるべきものを列擧せしものなるが、此の中にても朝霞布は或は霞氎・朝霞氎などとも記される場合もある。而も右に揭ぐる如く、縹氎、白氎布などと使用せられある外に單に氎なる一字使用の例もあれば、縹、或は白を以て色を示せる一種の意味的使用の形容副詞と見るべく、此の一種の織物の名稱としては先づ氎又は氎布と謂ふが支那人の氎字の使用習慣より觀て妥當らしく觀察せられる。吾人は右の數例より歸納して疊布、氎布なる名稱が、支那人に知悉せられし或る織物の名稱として存することを知り得るので、ヒルト氏の如く必しも白疊、帛氎の白、帛の文字をも此の織物の外國の名稱の音譯の文字と見る必要もなかるまいかと思ふ。

疊布と氎布とが果して同材料の織物なるや否やは問題にして、單に其の音の類似せるが故を以て遽かに疊、氎二字を異字同音、同一の織物名稱と速斷する譯にはゆかぬ。ヒルト・ロックヒル兩氏の如き單に音の上のみより兩者同一の音を示すと謂へるも吾人は敢て蛇足を加へて更に他の方面より兩者の同一織物を指すや否やを吟味せむと欲する。

疊と氎との文字の表に現はるゝ差異は僅に毛の添えるか否かに在るが、兩者の異同を論せむとするに當りては決して輕々の問題ではないと思ふ。『正字通』に據れば氎とは外國の細毛布なりとあれば、遽かに之を文句通に解釋する者は之を毛織物と觀るであらう。卽ち我が村瀨栲亭氏の如きは『秋苑日涉』卷十一にて氎を羅紗織物と見、朝霞氎霞氎にヒラシヤと傍訓を施して毛織物と解釋して

居る。併し朝霞氈の産地並に使用地は支那記錄の記する所を信ずれば主として雲南地方波斯地方南蠻地方にして、大體に於て氣候高溫度の地方なれば、氣候上の關係より見ても之を羅紗類と解するは少しく不穩當の樣に考へられる。加之らず氈布の地質の說明として比較的詳細なる記載を傳ふる明の陸應陽の『廣輿記』に據れば、其の材料に關しては何等の說明無けれども其の地質堅厚縝密頗る紬に類すとあれば、假に羅紗類としても餘程薄地のものと解釋せざるべからず。從つて恐らくば羅紗には非ざるべく察せられる。然るに『齊民要術』に引用せられたる『吳錄』に

吳錄地理志云。交趾安定縣。有木綿樹。高丈。實如酒杯。口有綿。如蠶之綿也。又可作布。名曰白緤。一名毛布。

なる記載あり。此の『吳錄』は吾人の調査する所に依れば張勃なる人の著述らしく、明の楊愼の『丹鉛總錄』に

張勃吳錄曰。交趾安定縣。有木綿樹。實如酒杯。口有綿。可作布。按此卽今之斑枝花。雲南阿迷州有之。嶺南尤多云々

とある前文は、一見して『齊民要術』所引のものと其の原本を同じくするを知るべく、從つて此の『吳錄』の張勃の著述なることは疑ふべきではないと思ふ。

却說張勃の說に據れば、木綿布を白緤又は毛布と謂ふとあるより見れば、動物質の毛より製せざる木綿織物をも支那人が毛布と稱呼する習慣の存することが知られ得る、尙ほ『後漢書』馮衍傳の記載に見ゆる「飢者毛食。寒者裸跣」の注に毛は草なりと謂ふ解釋もあれば益支那人が動物質の毛ならざるものをも毛と稱呼せしを知るに足り、從つて此の毛字の習慣的用法より論及すれば、氈字に毛字の加へられありても必しも之を獸毛製の織物と解

して村瀬栲亭氏の如く羅紗と見る必要は無い譯である。此の見地よりすれば『正字通』に所謂外國の細毛布なりと謂へる毛布も亦必しも獸毛製の織物の意に使用したるものと見る必要も無い譯である。斯樣に考察し來れば氈布は所詮木種木綿製の織物なりと謂ふ譯となり、要するに木綿織物である。

然らば疊布の方は如何と謂ふにラウファー氏の一說にては前揭の通り中世波斯語の絹織物の名稱なる dip 又は dēp の音譯ならむと謂へるも、これ又遽かに然かく決し難き證左がある。卽ち『唐書』西域傳に

高昌有草名白疊。擷花可織爲布。

『南史』夷貊傳下の高昌國の條に

有草，實如繭。繭中絲如細纊。名曰白疊子。國人取織以爲布。布甚軟白。交市用焉。

ともあれば、南北朝より唐代にかけて支那人の使用する白疊が、草種木種を混じたる白色木綿の

意なること甚だ明瞭なれば、南北朝頃以來の記載に見ゆる白疊布、帛氈布が何れも木綿織物たることは略疑ふべきではないと思はれる。然るに茲に一個解釋上の困難あり、そは『宋書』南夷傳扶南國の條に、王が使を遣して天竺の白疊古貝を献せし記載、『唐書』南蠻傳に占城王が白氈古貝を衣とする記載の存することである。この古貝が一に吉貝に作られ其の木綿織物なることは西曆一八九九年の『通報』に揭載せられしシュレーゲル氏(Schlegel)の論文 Geographical Notes に徵して明確であり、古貝卽ちKubai 吉貝卽ち Kipei が馬來語の木綿織物の意なるKapas より轉訛せしこと何人も是認する所であり、ヒルト、ロックヒル兩氏も亦『Chao-Ju-Kua』の第二百十八頁に於て此の說に贊同して居り之は、少しも疑ふべきでない。然らば今若し白疊を以て絹織物と解すれば、白疊古貝、白氈古貝は絹織物や木綿織物と謂ふ意味となり好都合であ

るが、白疊を木綿織物と解する時には、重複せる使用法となりて解釋が附し得られぬ譯である。之は如何に解決すべきである歟。

幸にして吾人は茲に一道の光明の耀くを發見する。卽ち支那記錄上にて木綿に關して白疊の文字の使用せられ居る多くの場合を通覽すると、不可思議にも高昌國に關する記載に多く、主として今日の天山南路地方の白木綿が白疊の文字もて記さるゝ樣である。之はラウファー氏も指摘せる如く『隋書』にも金繡白疊がソグディアナ(Sogdiana)地方の產物として記されあれば、蓋し疊はソグディアナ地方の木綿の稱呼の音譯にして、而も單に白疊とある場合は織成せざる白きワタ其のものを指すものと解せられる。之に反して古貝、吉貝は馬來語系のものなれば、白疊古貝を衣とするなどありて重複用法となれるものも、或は白木綿(ワタ)製の木綿織物の意には非ざるなきやと思ふ。

七

却說白疊、白氎が同一の織物材料を指し、白疊布白氎布が木綿織物ならむとは、南北朝の記載迄は溯り知り得たのであるから、『史記』榻布の注に唐の顏師古の使用したる白疊も亦木綿ワタ又は木綿織物の意に使用せしを知るべく、又裴駰が『漢書音義』に依りて榻布は白疊なりと謂へる白疊も亦木綿ワタ又は木綿織物の意と察せられる。『後漢書』哀牢夷傳に見ゆる疊布も亦同樣であると思ふ。

併し『史記』の榻布を解して「白疊也」と謂へるは裴駰が最初にして、彼は有名なる裴松之の子、卽ち南北朝の人であるから、若し裴駰が彼の生存當時支那人に知られし白疊卽木綿織物と謂ふ知識を以て榻布に注せしものならば、これ後世の考を以て古代の記載を解したるもので、決して妥當な說とは謂ひ得ないが、遽かに裴駰の見地が斯く誤謬

ありしとも斷じ難い。而も裴駰よりも古き晉の徐廣は單に榻は音吐合反と謂へるのみにして徐廣生存當時外國傳來品として甚だ珍重せられたるならむ木綿織物には少しも論及して居らぬ。蓋しこれ徐廣が榻布が木綿織物ならざることを明確に知悉せしが爲であらうとも考へ得らるる。

尙ほ之の問題に關聯して考慮すべきものに都布と橦布とがある。都布は『後漢書』馬援傳や『東觀漢記』に公孫述が馬援の爲に都布の單衣を製せし記載に現はれ淸の方以智の『通雅』卷三十七には之を解して

馬援都布單衣。注卽荅布。郝氏引史記貨殖傳榻布。注榻布白疊布。……按榻卽荅蕃布之稍粗者。

と謂ひ、都布と荅布と同一織物なりと謂ふ說さへあるのであるが、果して然るや否やは今遽かに判定することが出來ないのみならず、吾人の寡聞なる、未だ兩者の異同を論斷すべき好史料を發見して居らぬが、唯左太冲の『蜀都賦』の「黃潤比筒。籯金所過」の句に對する劉良の注には楊雄、司馬相如の記載を引き

黃潤。謂筒中細布也。司馬相如凡將篇曰。黃潤織美。宜制襌。楊雄蜀都賦曰。筒中黃潤。一端數金。

と見え、淸の惠棟の『後漢書補注』馬援傳の條には都布の單衣は卽ち黃潤の單衣にて、つまり蜀布の單衣なりとある。公孫述が馬援の爲に都布の單衣を製せしことの特筆せられあるは其の材料が當時として珍奇なりしが爲なるべく、卽ち黃潤が高價なることを謂へる左太冲及び楊雄の『蜀都賦』の文句とも事情が符合する譯で、同じく四川地方の產物なる次の橦布の事情と考へ合すれば、都布は木綿織物なるかも知れないと想像し得らるる。

次に橦布は『本草綱目』を初とし俞正燮氏の「木綿考」乃至ラウファー氏等の西洋の支那學者の研

究論著にも從來殆んど何等指摘論及する所無き一種の織物名稱なるが、『昭代叢書』所收の淸の褚華の『木綿譜』にも指摘する通り、元の陳高の『種橦死詩』の句に徵すれば

炎方有橦樹。衣被代蠶桑。舍西得閒園。種之漫成行。苗生初夏時。……高者三尺强。……結實吐秋蘭。皎潔如雪霜。……緝治入機杼。裁剪爲衣裳。御寒類挾纊。老稚免凄凉。云々

とあれば、元時代に於ける橦布は正しく草種木綿の織物である。然らば唐の杜甫の詩に「漢女輸橦布」、孫光憲の南越の詩に「曉厨烹淡葉。春杼織橦花」と見えたり、『文選』卷四所收の晉の左太冲の「蜀都賦」に「布有橦華」とあるも亦草種木綿織物と解すべきなる歟。魏の張揖は『蜀都賦』に注して

橦華者樹名。橦其花柔毳。可績爲布也。出永昌。

と謂へば、杜甫の詩や張揖の說明にては遽かに之を木綿植物と解し難けれども、孫光憲の詩は當時木綿の盛に栽培せられつゝありし南越地方の風俗詩なれば、此の橦花が綿花なることは略明瞭であると思ふ。之より推せば杜甫以下の使用せし橦布、晉の左太冲の使用せし橦華も或は木綿なるかも知れず。唐の李商隱の詩に「木綿花暖鷓鴣飛」なる句ありて、唐時既に多少ながらも南支那地方に木綿の栽培せられしことを推知し得らるゝことより考ふれば、今の四川省地方にも早く木綿が流傳し、之が橦花、貢潤、或は都布の名を以て支那人に珍重せられたるを察知するに難からざれば、蓋し橦を以て草種木綿、又は木種木綿と觀ても宜しからむかとも思ふ。矧んや橦字の意味は帆柱旗柱にして、其の本意を以てしては橦布、橦華の意味に解釋が附し得られざれば、これ蓋し或る植物に對する外國音か、又は地方的稱呼の音譯文字たるに近からむかと思はるゝをやである。

南北朝以來の支那記錄に見ゆる白疊又は白氎が

木綿織物であり、裴駰が『史記』榻布の注に使用したる白疊を木綿織物の意として使用したるものとする以上は、榻布は竟に木綿織物ならざるべからざる譯となるのであるが、然らば『漢書』の荅布の條に晉の孟康の注したる白疊は果して何の意味であるか。これ一應吟味すべき問題である。併し之に就きては吾人の不敏なる爲、未だ之を論證確定すべき好史料を發見して居らぬが、蓋し支那に於て栽培はせられざれ、ヒルト、ロックヒル兩氏の說の如く木綿織物は早く輸入品として中央亞細亞地方より黃河沿岸地方へ將來せられたるものならむと考へらるゝ故、孟康の使用せし白疊も亦恐くば木綿織物の意ならむと想像せられる。矧んや晉の左太冲の「蜀都賦」の橦華の橦を木綿樹と見る時は、晉人も既に木綿を知り居り、晉人の或る者は木綿織物を橦布と稱すると共に又或る者は中央亞細亞地方よりの外來語たる事明かなる白疊を以て之を稱呼せしものと解釋し得るをやである。

『史記』の榻布、『漢書』の荅布が果して木綿織物なるや否やを探究せむには、遽かに裴駰や孟康の加へたる注の說の如き比較的後世の說明の當否を決定するに沒頭せずとも、又別に他の方法を以てしても之を探究することが出來ると思ふ。そは木綿植物の世界的傳播の歷史を檢討して支那に何代より木綿織物が輸入せられ、何代頃より之が栽培せられたるかを探る方法である。

八

古來北部歐洲地方の俗諺に、埃及の亞麻、支那の絹、印度の木綿と謂ふ傳の存するは有名なることで、之は勿論或る時代に於て各々地方的特產品として世人の注意を惹きしが爲に起りし諺である此の諺に木綿が印度の特產品なることは卽ち古くより印度に木綿栽培の盛大なりし一證にして紀元

前八百年頃の作と謂はるゝ彼の摩奴の法典にも早く木綿の事見え、其の第二篇第四十四章に

婆羅門僧族の頭に戴く三筋の神聖なる絲は Karpasi 卽ち木綿の絲ならざるべからず。之に反して士族の者は Sana の絲、平民の者は獸毛の絲ならざるべからず。

とある外、第八篇第二百三十六章、第三百九十七章にも之に關する記載あり。次に紀元前四百四十四年頃の記載に係る彼のヘロドタス(Herodotus)第三卷第一百〇六頁には

野生の樹あり。其の果實は羊毛に勝るとも劣らざる美と便宜とを有する毛あり。印度人は皆之を以て衣裳を製す。

とあり、又たヘロドタスと同時代の人と考へらるゝクテシアス(Ctesias)の古文書にも木綿の話あることは、テオフヒラクツス(Theophractus)に引用せらるゝを以て明である。曰く

クテシアス曰く、印度に樹あり。毛を有す。印度人は皆之を以て衣裳を製す。其の葉は黑桑に似て樹の全體は野薔薇に髣髴たり。遠望葡萄樹の如く列を整へて平野に植えらる。

又、ストラボ(Strabo)にも第十五篇七百十九頁に印度人が白色衣にカルバサ(Carpasa)と稱するものを使用する記載あり。此のカルバサは梵語の Karpasa 卽ち『本草綱目』に所謂迦羅婆劫にして、ヘブリューに入りて Karpas となり、拉丁語にて Carbasus に轉訛するのである。

亞歷山大王と同時代なるアリストブラス(Aristobulas)が之を產毛樹として記したることもストラボ第十五篇第一章に見へ、又た印度河畔に轉戰したるネアルコス(Nearchus)は紀元前三百二十七年頃の言として

印度に毛束を有する樹あり。住民は之を以て絲を製し、脚半に達する肌着、肩を包む敷布、頭

巾は皆此の絲もて製せる織物を用ふ。此の織物たるや氣持よく美しく、他の如何なるものも及ばざる程の白色なり。

と謂へること、アリアン(Arrian)の記載に引かるゝ。尙ほペリプルス(Periplus)にも

精粗二種の木綿織物はAriana Barygazaより產出せられてMalao, Mundi, Mosyllon, Tabac, 地方、遠くはAfrica東岸へも輸出せらる。

とある外、早く埃及の亞剌比亞對岸地方に之を產する記載あるなど、木綿を珍重視せし古記載は相當多い。此のKarpasaなるの語の種々に轉訛せし徑路より見れば、木綿が古く印度の特產品として知られ、漸くにして傳播せられて埃及東岸地方にも栽培せられしを察すべく、歐洲古代にはこれ無かりしことを知るべきであり、之が支那に傳來せし歷史の攻究は自然榻布の材料如何の問題攻究の鍵となるべきである。

從來支那人學者間にて木綿なるや否や贊非相半する最古の記載は『尙書』禹貢なる

淮海惟揚州。島夷卉服。厥篚織貝。

にして、此の織貝に就きて略三說あり。其の一は、後人の僞作と謂はるゝ漢の孔安國の所說の如く、織と貝とを二品とし、織は一種の織成品、貝は水產物なりとするもの、其の二は之を一品と見て貝錦と解し、『文選』卷四の左太冲の「蜀都賦」に所謂「貝錦斐成翟色江波」などと見ゆるものにして、貝形を地紋として織成せるもの、其の材料は條件なくして大體に絹織物と解して居る。尤も禹貢は疑問の書なるも禹貢本文中に類例を求めても兗州の「桑土既蠶」、青州の「岱畎絲枲……厥篚檿絲」とあるに比較すれば、之を絹織物と解しても差閒はない。其の三は宋の蔡沉の說にして次の如く

島夷。東南海島之夷。卉草也。葛越木綿之屬。織貝錦名。織爲貝文。詩曰貝錦是也。今南夷木

綿之精好者。亦謂之吉貝。海島之夷。以卉服來貢。而織貝之精者。則入篋焉。

木綿織物となす說である。宋代に木綿が古貝、吉貝の名の下に支那人に知られ居りしは論ずる迄もないが、吉貝、古貝の支那記錄に現るゝ最古は『南史』以上に溯り得ざれば、蔡沉の說は宋代の考を以て貝字に附會したる解釋と思はるゝ故、之は採るに足らぬ。之を要するに禹貢の織貝は斷じて木綿織物ではない。

之に次ぎて問題となるは『史記』の榻布、『漢書』の荅布であるが、吾人が時代的に溯り究むる鄙說によれば、木綿織物に對する支那人の知見の存在痕迹は、如何に古く見ても晉代後漢時代迄しか溯り得られざるのであり、上は禹貢の織貝が木綿織物ならざる以上は、榻布、荅布は實は支那人の木綿に對する知見有無の境に立つ記載となり、甚だ解釋の困難なる問題となつて來る。而も尙ほ之を以て兪正燮氏の見解の如く木綿織物と見るべきものなるや如何。

九

『漢書』の荅布が『史記』の榻布と全然同一なる織物稱呼の異字ならむことは前述の通である。而も亦『史記』の該條の記載が戰國時代のことを記載せることも明かである。而して該條の記載を考察すれば、これ通邑大都に於ける一年間の商業取引の活潑なることを證據立つる實例として、一年間の物資の取引高を示せるもの、從つて「榻布皮革千石」とあるは榻布の取引高の多量なることを謂へること論ずる迄もなからう。然らば榻布は戰國時代に於て一般に多量に生產せられたる一種の織物にして、其の生產高も略皮革と同程度に上りし筈にて、決して珍奇なる織物には非ざりしことを察すべきである。

然るに後の歴史に徵すれば、木綿織物は比較的後世に於ても珍奇なる衣服材料として貴ばれたるが如く、前掲の通り雲南波斯印度地方より其の貢上あるや史家の特筆して之を史傳に記載せしも、實はその珍奇なりしが爲なるべく、施きて前後兩漢より魏晉の間に支那には殆んど木綿織物の生産の無かりしならむことを察すべきである。ユール氏(C.Yule)の『Cathey and the Way thither』第四百八十頁に引かるゝイブン・バツータ(Ibn Batuta)の支那旅行記の一節を見るに

絹は支那に於ては甚だ豐富なり。(中略)貧僧、乞食すら絹を衣裳に使用する程絹の産出は多量なり。(中略)實際絹物は非常に賤價にして木綿衣裳は却つて絹衣裳の二三倍の價を唱ふ。

とあり、イブン・バツータの支那に來りしは西曆一三六四年にして、此の年元の大都燕京に到れるなれば、つまり十四世紀の中葉に支那に於ては木綿織物は絹織物の三倍の高價を唱へしを知るべく、これ其の生産額少量に、在市品多からざる故珍重せられたるが爲である。而も木綿が元々外來植物、外來織物なるを思へば、此の趨勢よりして推せば、上古時代には尙更珍重せらるべき譯であり、史家の特筆せるも道理に合し、唐代には非常に珍重せられたる筈なれば、顏師古が白疊を木綿と解し、榻布を白疊に非ずと注せるも、善く榻布の木綿織物ならざることを自覺しての執筆なるべく、更に論鋒を進むれば、斯樣に時代の古き程珍重する程度の甚だしき木綿織物が、先秦時代に皮革と同程度に而も多量に通邑大都にて取引せらるることの有り得べしとも考へ得られざれば吾人は『史記』の榻布は決して木綿織物に非ずと考ふる者であり、從つて『漢書』の荅布も亦木綿織物に非ず『漢書音義』の說や、之を是認せる裴駰の說などは事實を無視したる解釋なりと謂はなければならぬ

と思ふ。

十

然らば『史記』の榻布、『漢書』の荅布は如何なる材料の織物なる歟。清の梁玉繩の『史記志疑』卷三十五には

附案。榻乃荅之譌。師古云麤厚之布。非白疊也。

晉書王沈傳拉荅者。有沈重之譽。可參。

とし、沈欽韓の『漢書疏證』卷卅四には荅布につき

按上言細布。則知足麤布。其時白氎未入中國。故孟康之說非也。荅布卽納布。宋書徐湛之傳。高祖微賤時。代荻有納布衣襖、以付長公主。柳元景傳。薛安都著絳衲兩當衫。衲卽納之異。

とし、王先謙の『漢書補注』卷六十一には晉の八伯の一人なる羊曼を䵋伯と謂ひし實例に據りて顏氏家訓云。䵋者多饒積厚之貌。與荅布重厚之意相近。集韻荅䵋二字同託合切。與榻音亦相近。

とありて、何れも厚手の粗布と解して居るが、其の材料の何物なるかにつきては何等論及して居らぬ。

然れども榻荅二字が意味文字として使用せられず、秦漢時代或る織物に對する俗稱の音を示す文字として使用せられたるものならむとは、班固が漫然として榻荅を通用せしめあるに徵しても明かである。但し榻荅二字の漢代の音は今日之を確實に知ることは出來ないが、Giles氏の Chinese English Dictionary に徵すれば、榻の今の支那音は tʻa 又は tʻah tʻak にして、荅の今の支那音は ta 又は tak, taah, tap なれば、兩字共今日の音にてT音を語根に有せることは明かであり、恐くは古代に於ても其の語根にT音を有せし文字なりしかと思ふ何れにしても秦漢代には同じ音なりし譯である而して都は今の支那音 Tou 橦は tung にて、共に榻荅の音と一寸關係づけて考ふることが出來ない

これ蓋し楮、都が木綿の外國名又は地方名の音譯ならむが爲ならむ歟。

然るに我が源順の『倭名類聚鈔』布帛部に商布なる語見えて、之に倭訓タニと傍書し、「和名多邇」なりと見ゆる。之に就きて谷川士清氏は『和訓栞』にたに。商布を訓するは倭名鈔に見えたり。たは手也。には布也。手作の布といふが如しといへり。文德實錄に交易布といへるも是なるべし。

と謂ひ、又平安朝時代の『保憲女集』に

雪にあはぬ鳥は雪をよきたふと思へり。

とありてタフと謂ふ語もあり。此のタフにつきて『和訓栞』には次の如く謂つて居る。

たふ、太布の音なり。たふぬのといふは重言なりと云へり。されど信濃國伊奈山中にいふたふぬのは楮の皮もて織りて服とす。或は栲布の遺れる名にやともいへり。又一說に津輕の邊にいふは卽けふのほそ布也といへり。

此のタフはシナノ木又は楮の皮もて織成したる布なること大槻文彥氏の『言海』に說明する所、事實に於ては麻布をも含めて斯く稱呼し、啻に信濃津輕地方のみならず、余の鄕里四國地方にても現に使用せらるゝ古語にして、井原西鶴の『一代男』にも

太布の縹色羽織に直徑四寸五分ばかりの紋に鎌と輪とぬの字を附けて云々

などと使用せられて居るから、餘程一般的に使用せられし古語たることが解る。尙ほ楮栲布を指す我が古語にタヘとタクとあり、タヘ、タク、タフ、タニと謂ふ四稱呼の間、何となく關係が有るかの如くにも考へられないでもない。但し其の記載に現はるゝ順序より見れば、タヘ、タクは早くも『古事記』に見ゆれば、四語の中其の通行の最も古きなるを知るべく、而もタフも亦平安朝時代の書なる『保憲女集』に見ゆれば之が平安朝以前より

通行せし古語なることも解る。從つて普通の說にてはタフはタヘ、タクより轉訛せるならむと謂はれて居るが、之は果して然るや否や、勿論疑も挾み得ると思ふ。『和訓栞』にも謂へる如く、タフヌノと謂ふは重言なりと謂ふが、實はタフヌノは或はタクヌノとも謂はれ、之が枕詞となるやタクヅヌノとなり、「タクヅヌノの白き」と使用せられて『古事記』に見ゆる。想ふに此のタクは taku の音には非ずして takhu の音なるべく、從つて或る場合にはKが弱く發音せられてタフとなり、或る場合にはKが强く發音せられてタクともなりしものかと思はるゝ故、結局タクヌノとタフヌノとは同一語源に發する所謂重言にて、自然タフの語も殆んどタクと同じ程度の古代より通行せし古語かと考へられる。而してタクヌノ、タフヌノが既に重言なる以上はタク、タフ卽ち takhu なる語にヌノの意あること申す迄もなく、所詮倭稱のヌノの意

ある takhu なる語が我が古代より通行せし譯となる。此の takhu が元來より takhu なしが、或は本來は tahu にて我が國の或る地方にてKが加味せられて takhu となりしものか、之は不明であるが、或はKが後に加味せられたるには非ざるなきや。之を要するにタフなる語も亦我が古代に通行したるものと考へ得られる。而して布は今の支那音にては pu又は pou, pwo にて我が邦に傳れる hu とは異なる如きも、我が hu とても元來は支那音の訛轉せしもので、又布袋(ホテイ)、布衣(ホイ)など謂ふ如く ho なる音も支那日本に存して居る。此の pu と ho との關係は、極めて密接して居り、歩の字が ho と共に po 或は bu の音傳ほり、夫の字が hu と共に pu の音傳はれるに徵すれば、布の今の支那音は pu にても、古くは hu の音も存し得る譯で、而も huが Khu ともなり得るは、今日の Hami なる地名に Khami 卽ち哈密の字をあてあるに徵して

も明かである。從つて布をhuと發音するは、蓋し支那古音の我國に傳はり殘れるには非ざるなきや。由つて想ふに、我が國にてタフなる語の存するは之が秦漢時代、楮栲布に對する支那人の俗稱にして、之が古く我が國に傳へられて其の儘使用せらるると共に、時にKの訛音も加味せられてタクなどとも轉訛し、而してタフが外來語なる爲、我が或る時代或る地方にてタフのみにては一寸意味が通じ難くなりし故、やがて其の倭名のヌノなる語を下に添加し、楮栲布に對する秦漢人の俗稱呼と其の倭名とを上下に連續してタフヌノ、又はタクヌノと謂ふ所謂重言となりしこと、猶ほ梵語の水の義なる閼伽と其の倭名ミヅとを不知不識の間に連續重言せしめて閼伽水として、之が『散木集』釋教部に見はるる通り、早くも平安朝時代より慣用せられしが如きものには非ざるかと思はれる。斯かる類例は支那にも存し、有爲轉變、禪定

等の有爲、禪が各々梵語の音譯にして、轉變、定がそれ〳〵有爲、禪の意譯を示し、而も各々上下に連續して成語をなすあるに徵すれば、我がタフヌノの場合に於ける鄙見も亦恐くば首肯を許さるべきであらうと思ふ。

タフに漢字を當つる場合は概して太布の二字を以てしてある。之に就きては人或は鄙見を駁する者あらむ。太布の太は倭言の古習慣より見れば美稱にして、神前を太前（フトマヘ）、太占を太占（フトマニ）などと謂へば太布の太も亦美稱にして、從つて太布（フ）の音は必しも秦漢人の楮栲布に對する俗稱の音譯なりとは解すべからずと。併し吾人は幸に此の駁論に對しても幾分辯明し得るのである。なるほど日本古代に於てはヌノに美稱を加へてフトヌノと稱呼し、漢字の傳來せられて後に之に太布の二字を配せしことフトマニに太占の二字を當てしと同樣のことは或はありしならむかと考へ得るかも知れざれども、

鄙見を以てすれば此の太布は如何しても楮栲布に對する秦漢人の俗稱の古く我が國に傳へられて、やがて太布の字の當てられたるものに相違あるまいと思ふ其の論據ともなすに足るべき一證は、『言海』に其の典據は明示せざれども タフに太布を當つると共に答布の二字をもあてあり、又た俗書なれども元祿十一年刊行の槇島昭武氏の『合類節用集』又の名『書言字考』詳しくは『和漢音釋書言字考節用集』卷六下服食部にてタフに太布を當つると共に荅布の字をも配しあるを見れば、太布と答布、荅布は皆同一材料の或る織物に對する名稱の文字なるべく答と荅とは同音にて又た太にも通ずるを察するに足らむ。而もこれ皆タフに當てあるより見れば、タフを漢字にて示す時荅布の二字を使用することも我が古代より通行せし習慣なるべく、此のことより見れば太布の太も荅布の答と同じく單に音を示す文字たるに止まり、決して美稱の意味の太には非ざるべしと解することが出來る。若し果して然りとすれば此の太布或は荅布は卽ち『漢書』の荅布にして從つて『史記』の榻布に相當し、秦漢人が或る織物に對して稱呼せし習俗的名稱の古く我が國に傳はりしものが太布、荅布卽ちタフにて、而して之が事實楮栲布なる以上は、『漢書』の荅布は楮栲布の意味であり、從つて『史記』の榻布も亦楮栲の皮を以て製したる織物なりと解釋せなければならぬ。『史記』の榻布を楮栲布と解釋しても其の該條の記載の意味には何等牴牾する所無く、古代に於て支那內地にて製產の多かりし楮栲布なればこそ、生產高多く在市品多量にて皮革類と等量に賣買取引も行ひ得たる譯で、之を秦漢時代に外國傳來品として非常に珍重せられたるならむ所の木綿織物と解しては、『史記』該條の記載が全く解釋出來なくなるから、吾人は蓋し榻布の材料は木綿に非ずして楮栲皮ならむと考ふる

次第である。

以上論ずる所の要項を摘出すれば略々左の如し

(一)榻布の字は『史記』貨殖列傳に見ゆるのみなれども、之は『漢書』貨殖傳の荅布と同音にて兩者共に同一材料の或る織物の名稱ならむこと

(二)榻荅二字は意味的使用の文字に非して、或織物に對する秦漢人の俗稱の音の當字ならむこと。

(三)榻布に注して裴駰の謂へる白疊、荅布に注して孟康の謂へる白疊は、木綿織物の意味として使用せしならむこと。

(四)白氎布、帛疊布は共に木種(キワタ)木綿織物に對する西域地方の稱呼にして、橦布も亦木種(キワタ)木綿織物ならむこと。

(五)『尙書』禹貢に見ゆる織貝は木綿の世界的傳播の歷史に徵し、又木綿織物の意なる吉貝の語の支那流傳の歷史に徵し決して木綿織物ならざること。

(六)『史記』の榻布は其の記載上より見て當時支那內地に於ける生產高の多量なる織物なりしならむこと。

(七)支那人の木綿織物に對する知見の存在は如何に古く觀ても、晉代或は後漢時代迄しか溯り得ざること。

(八)イブン・バツータの紀行に徵して元時代に於てすら其の價絹織物の三倍もせし木綿織物は、更に時代の古くなるほど之を珍重する程度甚だしく、先秦より前漢にかけては到底皮革などと賣買取引する程一般的に輸入せられ居らざりしならむこと。

(九)從つて榻布は木綿織物に非ず、孟康、裴駰がそれ〳〵荅布、榻布に注するに木綿織物の意として使用せる白疊を以てせるは、恐くは誤謬ならむと思はるゝこと。

(十)我が古語にて楮栲布をタフと稱呼する習慣あり

て之に太布荅布の漢字を當つる古習慣あるは、恐くは秦漢人の楮栲布に對する俗稱なるタフの古く我が國に傳へられたるものなるべければ、『漢書』の荅布は楮栲布なるべく、施きて『史記』の榻布も亦楮栲の皮を材料としたる織物ならむこと。（大正十二年五月廿日夜稿了）

民族大移動に就いて

文學士　植村清之助

一

歐洲史上、古代から中世への推移期は、中世から近世への推移期と同樣に、極めて重要な、又史的興味の深い時期である。舊い觀方のやうに、中世の社會を古代や近世の社會とは全く離隔された特殊の生活と思惟し、其間に社會生活並びに文化の連續性を認めないのは、甚しい過誤といふべきであらう。ギリシャ・ローマの時代を通じて發展し成熟して行つた古代世界の文化は、四五世紀に至つて一旦死滅し、十四五世紀から更に復活の氣運に向つたのであるといふ風に文化史の大勢を說かないで、寧ろ古代末は舊文化の新しい生活要素との抱容融合が行はれた時期であり、中世末は文化生活の急激な發展を示した時期であると考察するのが、史家としては穩當な態度ではあるまいか斯樣な見地からすれば、歷史の研究者は、中世の生活と文化を其特色固有の價値といふ上から觀察する藝術家の立場から離れて、其特色固有性が由つて來たる所以や、それが移り變つて行く徑路、